

# 第55回南日本新聞作文コンクール 宿利原 結衣さん 最高賞受賞



宿利原 結衣さん

第55回南日本新聞作文コンクールにおいて、宿利原小学校6年の宿利原結衣さんが、最高賞の南日本新聞社賞を受賞しました。鹿児島・宮崎両県の138小学校から370点の応募があり、3月3日（日）に鹿児島市の南日本新聞会館で表彰式が行われました。祖父との農業体験を通して感じたこと、考えさせられたことが素直に描かれた作品です。



祖父 宿利原 栄藏さん

## 「祖父のからいもは私の夢」

私たちが住んでいる宿利原は、標高二百メートルほどの高い場所にある。祖父の畑からは、大隅半島の山々が見渡せる。祖父の畑は二、四ヘクタールもある大きな畑だ。

私は、学校が休みの日にはいつも祖父の畑仕事を手伝っている。畑では、毎年からいもと大根を育てている。秋に行うのは、からいも掘りだ。おじさんたちが、掘り取り機という四人乗りの大きな象のような機械で次々からいもを掘っていく。私と祖父は、ベルトコンベアの両側にあるいすに座る。七から十个のつながったからいもたちが、象の鼻のようなベルトコンベアの上を流れてくる。私と祖父の仕事は、むらさき色の根っこでつながりたいもをちぎることだ。

「ふっとかからいもがきたぞ、ほら。はよせんな。間に合わないぞ。」

次から次に流れてくるからいもをちぎりながら、祖父が私に言う。私は、左手でいもがつながった一たばを高く持ち上げ、一気に振り下ろす。ほとんどのいもは根っこをはなれてベルトコンベアの上に落ちる。残ったいもは、右手でつかんで一つ一つちぎっていく。修おじさんが運転する掘り取り機は、一分間に二メートルの速さで進んでいく。学おじさんは忙しそうに選別をしている。四人全員で息を合わせなければならぬ作業だ。でもわたしは、家族で力を合わせて、仲良く仕事ができるからいも作りが大好きだ。

畑の半分くらいを作業し終わったところで黒くなったいもが流れてきた。私がちぎろう

とつかむと、いもはやわらかく、つぶれてしまった。これまでのいもとはちがって、くさったにおいがする。

「ないてくさったちよつどかいね。」

祖父が困った顔でおじさんたちを見た。

「なんでかね。調べてみらんといかんね。」

おじさんたちも不安そうな様子だ。作業を続けても掘り取り機のベルトコンベアには、黒いもが流れてくる。残りのいもは、ほとんどがくさっていた。

「今まででげなんことは、なかったたいが。」

祖父は両手に持った黒いからいもを見ながら言った。

私はいもがくさった原因をテレビのニュースで知った。原因は、「サツマイモ乾腐病」と「つる割れ病」という病気に加えて、「サツマイモ基腐病」という病気が一緒に発生したことが原因らしい。また、くさった部分をそのまま畑に残すと、そこから病原菌が増えてしまうので、悪い部分は完全に切り除かなければならないことも分かった。それにこの被害は、祖父の畑だけでなく、大隅半島や南薩の広い地域でおこっていることだった。

私は、暑いビニールハウスの中で種いも用のつる切りをしたことなど、これまで手伝ってきた様々な作業を思い出した。祖父が大切に育ててきたからいもが、どうしてこんな病気になるってしまったのか。去年と同じように、同じ畑にうえたはずなのに…。

ニュースで知ったことの中で気になったのは、水はけの悪い畑でこの病気がおこりやすいということだ。雨の量はこの病気には何か関係があるのではないか。私は、インターネッ

トを使って今年の鹿児島県の気候を調べてみた。今年は、去年よりも気温が高く、降水量も多かった。また夏は、一日の最高気温の平均が三十八度もあり、とても暑かった。インターネットで調べているうちに、「異常気象」や「地球温暖化」という言葉が出てきた。

地球の気温や海水の温度が上がっていて、私たちの周りに、異常な変化が起こりつつあるらしい。町の防災無線で聞いたイノシシの被害も山で食べ物をとることができなくなったイノシシが人の畑を荒らしていることなどで、環境の変化と関係があるのかもしれない。祖父の畑でおこっている被害やイノシシの問題を考えると、今の地球でおきている様々な環境の変化を知り、地球を守ろうとすることは、同じことなのかもしれない。

くさったからいもの処理が終わり、また来年のからいも作りに向けて準備が始まった。修おじさんが、畑にえん麦を植えた。えん麦を植えることで、畑に病害虫が増えるのをおさえることができる。畑のまわりに長く伸びたカヤを父とおじさんたちがビーパーでかっっていく。私と祖父は、熊手でそれを集めて、フォークを使って軽トラックに積む。

「結衣は、畑仕事が上手やらいねえ。しょう来は、農業をすっどかいねえ。」

祖父は、いつもやさしい目で私を見ながら、ほめてくれる。祖父やおじさんたちと一緒に畑仕事をしていると、楽しい気分になってくる。これからもこの大切な宿利原の畑を守ってきたい。わたしもいつかは、ここからいもを育てていきたいなという気持ちが大きくなってきた。